2020
秀作

第18回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール

外国人労働者と貧困

東京都・東京都立国際高等学校　２年　金井　美樹

私は以前親の仕事の関係でスイスのジュネーヴにて暮らしていました。言語もわからないままいきなり現地校に通うことになり、様々な文化の違いに衝撃を受けながらも悪戦苦闘しつつ生活していたのですが、そんななかでも強く記憶に残っている出来事があります。

私の通っていた学校はいわゆる現地校で、すべての授業がフランス語で行われていました。英語すら話せない状態で引っ越したゆえに、もちろん現地の子たちと同じ授業に出てもさっぱり理解できないため、私は第一外国語としてフランス語を新しく学び始める外国人専用のクラスにいました。そのクラスには私のように親の仕事や結婚の関係で来た人もいれば、祖国から亡命するためや戦争から逃れるために家族と別れ、その身一つで避難してきた子たちも在籍しており、皆同じように授業を受けていました。

私の友人はイランから３つ上の兄と二人でスイスに移住してきたという背景を持っていて、青年保護施設が管理するアパートに住みながら、お兄さんの僅かな収入と生活保護で出るお金で生活していました。彼は実際に何度かかなり切り詰めて生活をしなければならない状態だ、と口にしていて、どれくらい節約しなければいけないのか問うたところ１日の食事代を 15 スイスフラン（日本円にして 1,500 円程度）に抑えないとやっていけない、と答えてくれました。私が当時昼食に食べていた菓子パンとお茶だけで既に４スイスフラン近くになってしまうのですから、二人で 15 スイスフラン、そしてそれで十分な栄養を得るというのはかなり難しいのではないかと思います。また以前にも様々な国を転々としながらスイスにたどり着いたようで、彼自身は高校進学を望んでいるけれどもいつ国を追い出されるかわからないから貯金するために働かないといけないとも話していました。

学校には毎年恒例のイベントとしてスキーキャンプがあり、四泊五日で山に

© 金融広報中央委員会2020

行きスキーをすることになっています。そのキャンプには宿代や食事代、保険代に加えてスキー板や防寒服のレンタル代等合わせて300スイスフラン（日本円にして３万円程度）を経費として払う必要がありました。私や他国から親の仕事の都合で来た子たちは難なく支払うことが出来ましたが、私の友人にとってはカツカツに切り詰めた生活をしなければならないほど金銭に余裕がないため、簡単に払うことが出来る額ではありません。生活保護に上乗せする形で「学校行事」の費用を経費で落とせないか申請してみたり、学校側の援助を申し込んだりと費用をどうにか集めたり、防寒具やスキー用具を中古レンタルしたり、様々な手を使いましたがやはり全額は賄うことが出来ませんでした。ほかにも同様に費用を払うことが出来ない子が数名いて、彼らは諦めて参加しないことも考え始めていました。

勿論（もちろん）彼らだって行きたくないわけではありません。費用が賄えるならどうにかして行きたい、としょっちゅう言っていましたし、キャンプをだれよりも楽しみにしていました。私もどうせ行くなら皆で行きたいと思っていて、また残りの金額も50スイスフランとそこまで膨大な金額ではなかったためどうにか手助けができればな、と思い色々と思案しました。

そこで私は自分のクラスメイトは世界各国からきていることに着目し、それぞれ簡単な郷土料理を作りお昼時に校内で販売することにしました。一人一品を組み合わせて作った食事一式を日替わりメニューとして一週間売り続けた結果合計で200スイスフラン近くまでの利益を得ることが出来ました。この販売活動に参加したのは私を含めて10人だったため単純計算で一人20スイスフランを得ることが出来ました。これによって払わなければならない費用が30スイスフランにまで下がり、貯金からギリギリ捻出して最終的に皆で参加することが出来ました。

この経験から私は身近な貧富の差に気づかされるとともに、それを解決するための改善案を作ることの難しさを感じました。今回の話でいえば、私たちのように金銭的余裕がある人間が肩代わりしたり、募金を募ったりすることも出来たと思います。しかし、肩代わりするのでは肩代わりする側のメリットがないですし、肩代わりされる側もなんだか「借り」を作ったかのように感じえるかと思います。また募金を募るのでは募金する側の善意でお金を得ることにな

© 金融広報中央委員会2020

るのですから限界がありますし、「可哀想だから助けてあげる」といった考え方は援助される方を下に見た、いわば無意識の差別だとも取れます。それを助長させてしまうことにもなるのですから、この場合では最適案だとは言えません。今回は料理を売り、その収入を割り振ることで皆がメリットを得ることが出来ましたが、きっとこれより効率的な方法もあったのではないかと思います。

そしてこの経験は、外国人労働者の直面する困難について学ぶきっかけにもなりました。私の友人の場合、最初の一年はお兄さんがまだ18歳未満だったため保護者がいないというカウントとなり、生活保護に加え青年保護のための手当てが支給されていました。しかし、翌年以降はお兄さんが18歳となり保護者がいると認識された結果、手当ての支給が止まってしまい、ただでさえ切り詰めて生活していたところにアパートを自分で借りる必要が出てきたり、電気代やガス代、水道代の支払いもしなければならなくなったそうです。いきなり補助がなくなったことによる金銭面と精神面の弊害が沢山(たくさん)生じた、と彼は話してくれました。またそれによって友人も家計を支えるために高校進学を断念して、中卒のまま職につく必要がありました。しかし高卒と中卒では就ける職も限られてしまいますし給料だって雲泥の差です。外国人労働者の場合、言語が異なることが大半ですから学校に行かないことによって語学も身に付きづらくなり、それがまた職の選択肢の幅を狭める要因になります。その場をしのぐために職に就かざるを得ない状況から生まれる貧困の泥沼化は労働問題の一つとして挙げることが出来ると思います。

こういった外国人労働者と移民の問題はヨーロッパだけではなく、日本にも深くかかわっているといえます。労働力の深刻な不足が問題となりつつある現代で、代わりに労働している外国人労働者の数は2016年に100万人を突破しました。日本は単純労働者として在留することを受け入れない立場をとっているのですが、「留学生」として日本に学びに来た外国人がアルバイトで働いていたり、「外国人技能実習生」として技術を学びに来た外国人が戦力になっていたりします。日本国内では外国人労働者を貴重な労働力と考え重宝する動きもみられる反面、日本人の職を奪うことが懸念されていたりもするため賛否両論です。

また、外国人労働者をまるで消耗品のように扱い、ろくに給料を与えないまま搾取する粗悪な環境も残念ながら少なからず存在します。尋常じゃない長さ

© 金融広報中央委員会2020

の残業を毎日続けさせたりする上に寮もよい衛生状態とは言えないところに住まわせたり、抵抗できないのをいいことにセクハラやパワハラを続け奴隷のような扱いをするところも実際に存在したようです。また日本人がやりたがらないような肉体的負担が大きい仕事を外国人労働者に回していることも多々あり、また日本のことがわからないことを利用したり、出稼ぎに来ている人々の「お金を稼がないといけない」という考えを悪用して給料の割に合わないような厳しい仕事をさせていることが問題にあがり裁判にまで発展した件もありました。

その一方で、外国人労働者の受け入れも簡単なものではありません。言語が通じなかったり、文化が異なることからちょっとした指示も違った解釈をされてしまう、などといった文化の問題や給料を受け取ったとたんに失踪してしまう人の問題などもあります。

今では外国人労働者は日本、そして日本経済にとって重要な戦力となっています。このまま劣悪な環境が残り続け、それを懸念して外国人労働者が日本に来なくなったならば、労働力の足りなくなった経済は破綻しうるのではないでしょうか。日本の経済が外国人労働者の力を必要としている今、私たちは外国人労働者と共存する必要があると私は考えます。

そして外国人労働者と日本の労働者が共存し、日本の経済を維持させながらもすべての労働者が人権を守られるために、私はＡＩを有効活用することがカギとなると考えました。現代では、ＡＩが私たちの仕事を奪うのではないかと騒がれています。ならば、今外国人労働者が押し付けられている過酷な労働をＡＩが負担すれば、このような劣悪な人権侵害もなくなり人間の負担も減るのではないでしょうか。ＡＩにすべてを任せるのではなく、人間が操作をすれば間違いは格段に減るでしょうし仕事も残るでしょう。また外国人労働者の持つ言語や文化の問題もＡＩを使用することで簡単に解消または軽減できるのではないでしょうか。それぞれの負担が減ることによって作業が効率化し、また労働環境もよりよくなり労働者の貧困のループから抜け出せるのではないかと私は考えます。

＜参考文献＞
ＮＨＫ取材班『外国人労働者をどう受け入れるか』ＮＨＫ出版　2017年
池上彰『池上彰のやさしい経済学　１しくみがわかる』日本経済新聞出版社　2012年

© 金融広報中央委員会2020